アジア舞台芸術祭
参加者インタビュー#02

森 新太郎さん／演出家

演出家としてイプセン、ブレヒト、シェイクスピアなどの古典から現代劇まで多くの翻訳劇に取り組んできた森さん。「アジア各国のメンバーとコミュニケーションを取るのが楽しく、顔合わせの時点で参加してよかったと思った」と言う一方で、アジアの演劇と向き合うことの難しさも感じていたようです。

「ヨーロッパの翻訳劇の場合、日本人にとっては文化の距離が遠すぎて、それゆえ楽々と飛び越えられてしまうところがある。チェーホフを上演するときにイギリス人がするような苦労を、日本人はしていないと思います。たとえば舞台上で相手を“トム”と呼ぶだけで異化効果が生まれる。ですが欧米人にとってはリアリズムの延長にありますから、二重にも三重にも工夫しないといけない。
日本人にとってはアジア、たとえば韓国の戯曲をやるほうが難しい。近しい国だからこそ嘘もつけないし、かといって引き寄せきれないというところがあって。近いがゆえに飛び越せない」

今回、各国の演出家に与えられたテーマは「米/稲〜食生活の共通性と差異について」。森さんのチームには、ハノイからタンロン水上人形劇団の女優、グエン・バオ・チャムさんが参加しました。

「自分たちのチームの共同作業、それから各チームの作品を通じて、グローバル化ってすごいスピードで進んでいるな、同じものを見て育ったんだなと感じました。共通性はいくらでもあるのですが、差異を見出す方が実は難しかった。
僕のチームの作品には、日本にはない米文化である“チェー”を登場させました。食文化もまたグローバル化が進んでいますが、本当の故郷の味って忘れられないものなのではないか、と思って。
他にも、チャムさんはユニクロが大好きだったので、作中でアオザイの上にユニクロを着てもらったり。違う文化同士が衝突し融合していく現場だったと思います」

チャムさんの携わる水上人形劇はベトナムの農村部で生まれた非常に歴史の古い伝統演劇です。一方、森さんのチームは今回、日本の伝統的な能の演目である「井筒」をモチーフに選びました。

「チャムさんに能について説明したのですが、入門的な説明はできても、専門的な質問が来たら答えられない。自分の文化のルーツを見直すことにつながりました。

また原作の能の舞には、女が昔の楽しかった頃を思い出して幸せだが、同時に寂しいという情緒がこめられています。こうした気持ちを表現する踊りがベトナムの伝統舞踊にあるかチャムさんに尋ねましたが、ちょっと見つからなかった。と同時に、日本にはなぜそんな価値観があるのかを考えさせられました」

日本人同士なら“なんとなく”で理解し合えるところも、はっきりと説明しないといけない。だからこそ、自分の頭のなかもクリアになっていった、と言う森さん。今後は、自分が海外に滞在しての創作にも意欲的です。

「今回、僕は結構やりやすい環境にいたと思います。場所も日本で、周りも日本人。海外から来たチームはどれだけ大変だっただろうか、と思う一方で、彼らと同じような環境にいたら、さらに得るものが多かっただろうとも思います。他国で演出家として自分のビジョンを説明するには、その根っこのところに向き合い考える必要が出てきますから。
自分が他の国へ行って作るくらいのことをやって初めて、コミュニケーションの何たるかがわかるのかもしれません」